

株式会社 シガ木工

筆筒製造の分野で100年以上の実績 桐筆筒の着色性向上に挑戦

事業 内容

「紀州筆筒」の老舗メーカー 時流に合わせた和筆筒の開発・製造

1914年(大正3年)設立であるが、明治時代から100年以上の業歴を有する伝統工芸筆筒メーカーである。業界内でも古参企業に分類され、現代表取締役の志賀氏が6代目にあたる。

かつては、現在一般に使用されている和筆筒の製造工程の機械化にも貢献し、業界基準(事実上の標準とみなされるようになった和筆筒の規格)の確立に際してその一翼を担ってきた。時代とともに和筆筒から洋筆筒に主流が移り変わるなかでも和筆筒の製造を主な事業とし、運営がなされてきた。同社の主力製品である桐筆筒は「紀州筆筒」

と呼ばれ、経済産業大臣指定伝統的工芸品にも認定されており、その価値は高い。主に家具専門店や百貨店に卸している。

最近の転換点は阪神淡路大震災である。倒壊した家屋の建替え時には伝統的な和の建築が減り、和筆筒が家に馴染まなくなったことに加え、高額な筆筒の購入を避ける傾向が強まり、需要が減退した。そのようななかでも洋室にも合う焼桐の筆筒を作り出し、苦難を乗り越ってきた。時流に合わせて和筆筒を開発・製造できる点が同社の強みとも言える。

補助 事業

空調機器による湿度調整と 製品の安定供給を目指す

時代に合わせて和筆筒の開発・製造を進めてきている同社であるが、現在は洋室の壁紙にも馴染むカラーバリエーションを取り揃え、数年前からは着色された和筆筒の開発に力を入れている。今まで和筆筒に着色することはそれほど行われてこなかったため、アイデアとしても斬新である。

しかしながら、桐筆筒に着色することは容易ではなく、さまざまな色合いを出していくには工場内を一定の温湿度に保持する必要がある。空調機器によって温湿度を安定させ、生産工程における製品の劣化や変色を防止しつつ表面の着色化に取り組むことが課題となっていた。

また、ここ数年来、異常気象と呼ばれるほど雨の日が続きがちであり、これは湿度に左右される業種にとっては死活問題である。天候を理由に納期が遅れば同社の信用

にも関わるため、屋外の湿度が高い日でも仕事を行える環境を整えておく必要があった。

そこで今回の補助事業では、桐筆筒表面の着色性向上を目的として空調機器を導入し、気候(気温・湿度)に左右されない製品の安定供給を目指した。



成果

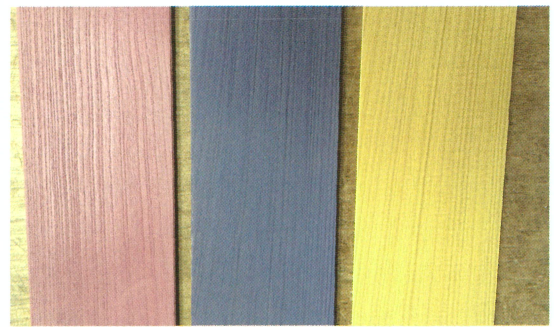
試験的な製品開発に成功 受注体制の確立には課題も

染色した砥粉を塗料の下地として用いることにより、カラーバリエーション豊富な表面着色ができるようになり、年輪の風合いを出しつつ通気性のある状態を維持した桐箆笥の製造が可能になった。空調設備の寄与も大きく、着色した板の耐久性についても50年程度はほとんど色落ちせずに使用できる。また、実験を重ねることで、着色するための染色料にも急性毒性がないことが確認でき、製品の安全面も確保することができている。

試験的な製品開発にも成功し、展示会に非売品として出展したところ、桐箆笥に詳しいユーザーからの反応は上々であり、百貨店バイヤーからも一定の評価が得られた。

しかしながら、小口の受注に対応できる体制は構築できつつあるものの、まとまった受注への対応には課題も多い。和歌山県は廃棄条例の基準が厳しく、まとまった数を受

注するとなると廃棄処理に伴う設備を導入する必要がある。結果、協力業者に依頼しつつ、少量生産を行う体制にとどまっている。今後の引合いの状況等を見ながら、随時見直していく予定である。



今後の展開

一般の人でも手が届く桐箆笥へ 認知度の向上が必須条件

大手家具量販店の台頭に伴って、消費者の低価格志向が強まり、高価格帯に分類される桐箆笥は選択肢にもあがらないのが現状である。この状況を打破するには、職人が作る高品質の桐箆笥を、30~40歳代の若い世代にも手が届く価格帯で提供することが肝要だ。

そのためにも、桐箆笥メーカーの数がこれ以上減ることは避けたい。なぜならメーカーの減少は消費者が桐箆笥に触れる機会そのものを減らしてしまうからである。ここ数十年のスパンで見てもメーカーの数は年々減少しており、歯

止めがかからない。桐箆笥の販売数量増加のためには認知度向上は必須条件とも言えるだろう。

今後については、本業で利益を創出し、労働環境を整えることにより、若い世代にも魅力ある職業にしていきたいとしている。「今、取り組んでいることが成果(結果)に結びつくまで5年、10年掛かる。見えにくいかもしれないが、辛抱して中長期的な視点でものづくりに取り組んで欲しい」と代表の志賀氏は若い世代の職人にメッセージを送る。

